

ノーベル賞の国際政治学

——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人推薦者——

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize :
The Nobel Peace Prize and Japan, Japanese Nominators before World War II**

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

本稿は、第二次世界大戦前にノーベル平和賞候補をノーベル委員会に推薦した日本人の推薦状況をノルウェー・ノーベル研究所にある史料で明らかにしたものである。第二次世界大戦前に有賀長雄（国際法学者）と渋沢栄一（実業家）の2名がノーベル平和賞候補になっていたことは既に明らかにした。渋沢の事例では、日本人が推薦の主役を演じた。この事例以外に日本人の推薦者は第二次世界大戦前にいたのであろうか。

実際に史料にあたると、外国の個人、団体を推薦した日本人が少なからずいた。日本人に推薦された外国の個人、団体とは、1912年のアメリカ・キリスト教団体、世界連合キリスト教共励会、1923年、1929年のジェーン・アダムズ、1928年、1939年のロバート・ベーデン＝パウエル、1931年のエドワード・プライス・ベルであった。本稿は、これらの候補に対する日本人推薦者、推薦内容を整理し、その特徴をまとめた。特徴としていえるのは、第1に外国でのノーベル平和賞推薦キャンペーンに参加したと考えられるケースが第二次世界大戦前には多い。第2に、渋沢が候補となったことを経て、1920年代末から1930年代初めに日本人による推薦活動は活発になった。第3に、日本人による推薦が受賞者の決定に対して影響力をもったとはいえないが、第一次世界大戦後、日本の存在を推薦という形でノーベル委員会に示すことはできたと考えられる。

キーワード：ノーベル平和賞、ノーベル委員会、世界連合キリスト教共励会、
ジェーン・アダムズ、ロバート・ベーデン＝パウエル、
エドワード・プライス・ベル、ノルウェー

Summary

This paper aims to demonstrate nomination by Japanese for the Nobel Peace Prize before World War II according to historical materials of the Norwegian Nobel Institute. It is already noted that two Japanese, an international law scholar Nagao Ariga and a business leader Eiichi Shibusawa, had been nominees for the Nobel Peace Prize. Eiichi Shibusawa was highly nominated by Japanese. Were there any other Japanese nominators for the prize before World War II ?

According to existing historical materials, some Japanese had actually nominated foreign persons and organizations for the prize: American Christian Organization, World's Christian Endeavor Union, in 1912, Jane Addams in 1923 and 1929, Robert Baden-Powell in 1928 and 1939, and Edward Price Bell in 1931. The Japanese who had nominated them are listed in this paper. And the reasons for their nomination are featured; firstly, it is considered that early nominators had often participated in foreign nomination campaign for the Nobel Peace Prize before World War II. Secondly, the nomination of Eiichi Shibusawa gave momentum to nomination by Japanese between the late 1920s and the early 1930s. Thirdly, it is considered that the presence of Japan was indicated to the Nobel Committee for these nominations after World War I though Japanese nomination was not influential to decide the winner.

Key words : the Nobel Peace Prize, the Nobel Committee, World's Christian Endeavor Union, Jane Addams, Robert Baden-Powell, Edward Price Bell, Norway

はじめに

本稿は、第二次世界大戦前にノーベル平和賞候補をノーベル委員会に推薦した日本人の推薦状況をノルウェー・ノーベル研究所にある史料で明らかにしたものである。1909年に国際法学者の有賀長雄（1860～1921年）、1926年、1927年に実業家の渋沢栄一（1840～1931年）の2名がノーベル平和賞候補になっていたことは既に明らかにした¹⁾。有賀は、スイス人国際法学者のカール・ヒルティ（Carl Hilty, 1833～1909年）による推薦であった。それに対して、渋沢の事例では日本人が推薦の主役を演じ、アメリカ人を巻き込む形で推薦活動が行なわれた²⁾。渋沢の事例以外に日本人の推薦者は第二次世界大戦前にいたのだろうか。

本研究のため、筆者はノルウェー・ノーベル研究所にある第二次世界大戦前の推薦状ファイル进行调查した。その結果、ノーベル財団によるノーベル平和賞ノミネーション・データベース³⁾

とノルウェー・ノーベル研究所の年次報告書のリスト⁴⁾に存在しない推薦状が多く見つかった。その調査結果をまとめたものが、第二次世界大戦前のノーベル平和賞日本人候補者、推薦者一覧の表である。これに示されるように、外国の個人、団体を推薦した日本人が少なからずいたことがわかる。日本人に推薦された外国の個人、団体とは、1912年のアメリカ・キリスト教団体、世界連合キリスト教共励会（World's Christian Endeavor Union）、1923年、1929年のジェーン・アダムズ（Jane Addams、1860～1935年）、1928年、1939年のロバート・ベーデン＝パウエル（Robert Baden-Powell、1857～1941年）、1931年のエドワード・ブライス・ベル（Edward Price Bell、1869～1943年）であった。本稿は、これらの候補に対する日本人推薦者、推薦内容を整理し、その特徴をまとめたものである。

1 世界連合キリスト教共励会の推薦（1912年）

（1）世界連合キリスト教共励会

日本人によるノーベル平和賞の推薦で最も古いものは、1912年になされた世界連合キリスト教共励会に対するものである。同団体は、1881年にフランシス・エドワード・クラーク（Francis E. Clark、1851～1927年）牧師がアメリカで始めたものである。その後、世界に広がり、日本にも1885年に伝えられた。岡山で始まり、その後札幌、金沢、東京などに広がっている。1893年にはクラーク牧師も参加して神戸で第1回全国共励会大会が開催され、初代会長に原田助（1863～1940年）牧師が選ばれている⁵⁾。

同団体がノーベル平和賞に推薦されたのは1911年、1912年、1913年の3回である。1911年に関しては、アメリカの下院議員マッコール（Samuel W. McCall）が推薦している⁶⁾。1912年にはノルウェーの閣僚が同団体を推薦し、さらに「団体関係者からの様々な文書、推薦状」も提出されたとノーベル研究所の1912年年次報告書に記録されている。実際に推薦状ファイルを見ると、「様々な文書、推薦状」の中にはマッコール下院議員らの推薦状も含まれている⁷⁾。これに示されるように、1912年には同団体により国際的な推薦キャンペーンが展開されたと考えられる。1913年にはノルウェーの国会議員と閣僚が同団体を推薦している⁸⁾。しかし、3回ともノーベル委員会の選考において同団体は絞り込みのためのショート・リストの対象とはならず、調査報告書が作成されることはなかった⁹⁾。そのため、有力候補とはならなかったと考えられる。

（2）1912年の推薦

日本から世界連合キリスト教共励会を推薦した推薦状は、2通ある。1通目（A4判1枚）は、同志社大学総長の原田助による1912年3月14日付け推薦状である¹⁰⁾。同志社大学総長のレター・ヘッドのついた用紙に京都の差出地が書かれている。これは本文5行からなる短いものである。「世界連合キリスト教共励会が1912年ノーベル平和賞に値するものとしてご検討のため推薦され

表 第二次世界大戦前のノーベル平和賞日本人候補者・推薦者一覧

選考年	候補者	職業・肩書き等	推薦者	職業・肩書き	推薦状日付(差出地)
1909	有賀長雄	国際法学者	Carl Hilty	スイス国際法学者	1908年3月20日付(ベルン)
1912	世界連合キリスト教共励会 (World's Christian Endeavor Union)	アメリカ発祥のキリスト教団体	原田助	同志社大学総長	1912年3月14日付(京都)
			澤谷辰治郎	同団体日本支部幹事	1912年3月16日付(岡山)
			James H. Pettee	同団体日本支部名誉会計	
1923	ジェーン・アダムズ (Jane Addams)	アメリカの社会事業家	和田とみ	九州帝国大学	1923年7月17日(福岡) 2通
			古屋登世子	婦人会関西連合会	無 2通
1926	渋沢栄一	実業家	原田助	前同志社大学総長・ハワイ大学教授	1925年11月3日付(ホノルル)
			David Starr Jordan	スタンフォード大学教授	1925年11月25日付(カリフォルニア)
			加藤高明	首相	1925年12月15日付(東京)
			幣原喜重郎	外相	
			後藤新平	貴族院議員・元内務大臣	
			金子堅太郎	枢密顧問官・国際法学会会員	
			古市公威	枢密顧問官	
			富井政章	枢密顧問官・ハーグ常設仲裁裁判所裁判官	
			徳川家達	貴族院議長	
			粕谷義三	衆議院議長	
			阪谷芳郎	貴族院議員・元大蔵大臣	
			高田早苗	貴族院議員・早稲田大学総長・元文部大臣	
			鎌田栄吉	貴族院議員・元文部大臣・元慶應義塾大学塾長	
			井上準之助	貴族院議員・元大蔵大臣	
			沢柳政太郎	貴族院議員	
			服部宇之吉	東京帝国大学中国哲学教授・日本帝国学土院会員	
			山田三良	東京帝国大学国際公法・私法教授	
			姉崎正治	東京帝国大学哲学科宗教学・宗教史教授	
			立作太郎	東京帝国大学国際法・外交史教授	
			John R. Mott	YMCAアメリカ全国会議事務総長	1925年12月25日付(京都)
			A. L. Dean	ハワイ大学総長	1925年12月28日付(ホノルル)
			E. H. Gary	アメリカ鉄鋼会社社長	1926年1月5日付(ニューヨーク)
			松平恒雄	駐アメリカ大使	1926年1月11日付(ワシントン)
日置益	駐ルウウェー元公使、中国関税特別会議特命全權大使	1926年1月18日付(北京)			
1927	渋沢栄一	実業家	若槻礼次郎	首相	1926年12月15日付(東京)
			幣原喜重郎	外相	
			金子堅太郎	枢密顧問官・国際法学会会員	
			徳川家達	貴族院議長	
			粕谷義三	衆議院議長	
			沢柳政太郎	貴族院議員	
			姉崎正治	東京帝国大学哲学科宗教学教授	
原田助	ハワイ大学教授	1926年12月28日付(ホノルル)			
1928	ロバート・ベーデン=パウエル (Robert Baden-Powell)	ボーイスカウト運動創始者	後藤新平	大臣待遇・貴族院議員・東洋大学学長・少年団日本連盟総長	1927年12月23日付(東京)
			渋沢栄一	国際連盟協会会長・文政審議委員	
			小村欣一	貴族院議員・外務省情報部長	
			林博太郎	貴族院議員・文政審議委員長・東京帝国大学教授・文学博士	
			新渡戸稲造	前国際連盟事務局次長・東京帝国大学教授・農学博士・法学博士	
			沢柳政太郎	貴族院議員・文部省教科書調査会会長・帝国教育会長・文学博士	
			阪谷芳郎	男爵	
1929	ジェーン・アダムズ (Jane Addams)	アメリカの社会事業家	安井てつ	東京女子大学学長	1928年11月30日付(東京)
			岸清一	大日本体育協会	1928年12月7日付(東京)
			吉田茂	外務省次官	1928年12月12日付(東京)
			徳川家達	貴族院議長	1928年12月12日付(東京)
			河井道	日本婦人平和協会理事	1928年12月12日付(東京)
			水野錬太郎	前文部大臣	1928年12月27日付(東京)
			幣原喜重郎	外相・首相臨時代理	1930年12月11日付(東京)
1931	エドワード・ブライス・ベル (Edward Price Bell)	『シカゴ・デイリー・ニュース』紙記者、外信部長	幣原喜重郎	外相・首相臨時代理	1930年12月11日付(東京)
1939	ロバート・ベーデン=パウエル (Robert Baden-Powell)	ボーイスカウト運動創始者	二荒芳徳	伯爵、列国議員同盟委員、大日本少年団連盟理事長	1938年10月1日付・同年12月16日付(東京) 2通

註： 肩書きは、基本的に推薦状に使われたものを載せた。

出所： Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjorelse for Nobel Fredspris* およびノーベル研究所史料より、筆者作成。

たと理解しておりますが、同団体が顕彰と榮譽に値するものであると東洋の多くの友人たちのようにあなた方にもみられることを期待して、私からも心よりの同意を付け加えさせて頂きたい」と原田は記している。原田は、前述のように日本の共励会の初代会長を務めた牧師であった。

2通目（A4判1枚）は、世界連合キリスト教共励会の日本支部幹事の澤谷辰治郎¹¹⁾と同支部名誉会計ジェイムズ・H・ペティアー（James H. Pettee、1851～1920年）¹²⁾が連署した1912年3月16日付けの推薦状（差出地は岡山）である¹³⁾。原田のものよりは若干長めの文章である。すなわち、「ちょうど受け取ったアメリカの新聞によれば、S・A・マッコール議員らは1912年ノーベル平和賞が世界連合キリスト教共励会に授与されるよう求めています。我々は、そうした提案を支持したい。キリスト教共励会運動は、創始者フランシス・E・クラーク博士の指導の下に、すべての国々の若者たちが世界平和と国際的兄弟愛に賛同するよう、強力で遠大な影響を及ぼしていると感じます。他の地域と同様、日本においても年次大会のたびに、この問題がいろいろな形で提起され、若者たちは仲裁、友愛、奉仕の大義を信じて活動しようと訓練を受けています。」

以上の2通の推薦状にみられるように、原田も澤谷らも同団体がノーベル平和賞に推薦されていることを知り、それを支持しようと推薦状を書いたと考えられる。岡山発の推薦状では、新聞記事でノーベル平和賞推薦のことを知ったとしていることから、国際的なキャンペーンに自発的に参加したと考えることもできよう。しかし、推薦にあたり、推薦先のノルウェーのノーベル委員会の住所等の情報が必要であるため、同団体本部とのかかわりも否定できない。また、これら2通の推薦状は、原田自身が共励会に関係する牧師であったこと、京都と岡山という近接地においてほぼ同時期に出されたこと、宛名の表記がフランス語でノルウェー国会ノーベル委員会（Comite Nobel du Parlement Norvegien）と書かれ、住所の国名は英語でノルウェー（Norway）となっているちぐはぐな面が共通していることも考慮すると、2通の推薦状は連携して出されたと考えることが妥当であろう。

なお、この推薦状2通は、執筆時期が3月中旬であり、既に推薦が締め切られ、選考がかなり進んだ段階でオスロに到着したと考えられる。そのため、この書簡は1912年分の推薦状ファイルには保存されているが、ノーベル委員会による受付番号がつけられておらず、ノーベル研究所の年次報告書リストにも記載はない。また、翌年度の推薦として扱われることもなかった。これらの状況を考慮すると、日本からの2通の推薦状は「団体関係者からの様々な文書、推薦状」の1つであり、既に推薦された候補に対する参考資料として扱われたと考えられる。

この推薦で重要なことは、執筆日から判断して原田助が日本人として初めてノーベル平和賞に推薦を行なった事実である。彼は、アメリカのイェール大学留学の経験を持ち、その後、ハワイ大学教授にもなるなど、英語に堪能であった。1926年、1927年の渋沢栄一推薦のときには詳細な推薦状を執筆し、推薦人として中心的役割を果たしている¹⁴⁾。その彼が1912年の段階でノーベル平和賞の推薦状を書いた経験があったことは、この時点で既にノーベル平和賞の存在を認知

し、世界からの推薦状に基づいて選考が行なわれるという選考過程についても一定の知識を得ていたことになる。その意味では、10年以上の空白期間があるとはいえ、その後の渋沢栄一推薦につながる第一歩とみなすことができよう。

2 ジェーン・アダムズの推薦（1923年、1929年）

（1）ジェーン・アダムズ

アメリカの女性社会事業家、ジェーン・アダムズに対する日本人の推薦は、1923年と1929年の2回行なわれている。アダムズは、1905年のズットナー（Bertha Sophie Felicita von Suttner、1843～1914年）に続き、1931年に女性として2人目のノーベル平和賞受賞者となった人物である。早くから同賞の候補に挙げられ、合計8回推薦された。すなわち、1916年に最初の推薦がなされ、その後も1923年、1924年、1925年、1928年、1929年、1930年、1931年に推薦がなされている¹⁵⁾。推薦者は、アメリカのみならず、ヨーロッパなどにも広がり、国際的にアダムズを推薦する動きが存在していた。

アダムズは、1889年にアメリカのシカゴに貧民のためのセツルメント施設、ハル・ハウスを設立し、アメリカにおいて社会事業を活発に展開するとともに、婦人参政権をはじめとする女性の権利擁護運動、労働運動、平和運動にも尽力した人物である¹⁶⁾。また、1919年から10年間、婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom：WILPF）の会長も務め、世界中で国際会議出席、講演活動なども精力的に行なっている。ノーベル平和賞の賞金は、このWILPFに寄付されている¹⁷⁾。

（2）1923年の推薦

アダムズは、1923年に多数のノーベル平和賞推薦を受けている。1923年のノーベル研究所年次報告書には、30件の推薦が記録されている¹⁸⁾。たとえば、ウェッブ・ロンドン大学教授（Sidney Webb、1859～1947年）、デューイ・コロンビア大学教授（John Dewey、1859～1952年）、アトリー英下院議員（C. R. Attlee、1883～1967年）、ウィルソン米大統領（Woodrow Wilson、1856～1924年）をはじめ、欧米の多くの学者、政治家から推薦されていた。

この年に、日本からも九州帝国大学助手の和田とみ（1896～1993年）¹⁹⁾が推薦状をノーベル委員会に提出していた。和田自身、1983年に刊行した自伝に「私も女史の来朝後、彼女について知る限りのことを書いて、ノーベル賞選考委員会に推薦状を送りましたが、女史の授賞はむしろ遅すぎたというのが当時の私の実感でした」と記し²⁰⁾、推薦状を書いたことを既に明らかにしていた。和田は、1923年6月～8月のアダムズの来日時に通訳、案内役として同行し、アダムズをよく知る人物である。和田の推薦状は、上記のノーベル研究所年次報告書にも、ノミネーション・データベースにも記録がない。しかし、ノーベル研究所に所蔵される1923年推薦状ファ

イルには、この推薦状も受付番号はないものの、保管されている。その理由として3点が考えられる。第1に、推薦状は1923年7月17日付けであり、これがオスロに実際に到着したのは同年の推薦状の締め切りを大幅に過ぎ、選考がかなり進んでいた8月23日であった²¹⁾。第2に、次年度分に回さずに1923年度分として扱われたのは、この推薦状がアダムズの推薦を日本からも支持し、アダムズの来日時の活動を紹介する趣旨で書かれており、他の推薦状の参考資料とみなされたと考えられる。第3に、推薦者の推薦資格について問題があった可能性もある。和田は推薦状に九州帝国大学の心理学の教員と記していることから、役職、専門領域の点で疑問が残ったのかもしれない。

では、実際に和田とみの1923年7月17日付け推薦状(英文、タイプ打ち)2通を見てみよう²²⁾。第1書簡(A4判1枚)で、和田はまず冒頭で「あらゆる階級の日本人男女に平和、人道的福祉の思想を促進するためにジェーン・アダムズ氏が行なった日本での活動を報告する」ことを指摘した後、自己紹介をしている。和田が婦人国際平和自由連盟のメンバーであり、ウィーンでの会議にも出席し、北欧の女性らとも会ったことに触れ、彼女らに多大な敬意をもっているとしている。また、コロンビア大学で学び、心理学の博士号をとった後に帰国し、九州帝国大学に初の女性教員として勤め、心理学の研究活動をしていると述べている。後半では、アダムズを1921年以来知っているとし、「アダムズの来日により、日本女性が世界の諸問題に関してかなり異なる考えをもつようになる強い衝撃がもたらされた」とする。さらにアダムズのノーベル平和賞受賞を支持する理由として、「アダムズの個人的榮譽のためというよりも、平和のためにずっとたゆまず活動する世界の女性たちのため」としている。最後に、「日本の女性たちの最高の推薦を考慮してもらえれば、大変光栄である」と結んでいる。和田は、この書簡に1923年6月のアダムズ来日時の写真を添付し、そのニュースを広めるために利用してほしいことも伝えている。写真は、L版の鮮明な白黒写真12枚であり、裏には和田によると思われる手書きの説明がつけられている。アダムズが日本人から大歓迎を受けている写真、神戸、大阪での食事会、講演会を写したものもある²³⁾。この当時、ノーベル平和賞の推薦状に写真が多数つけられていることは稀であり、ノーベル委員会も推薦状とともにこれらの写真を1923年推薦状ファイルのアダムズのフォルダーに保管していた。このアダムズの来日時の活動が明確に伝わる写真はノーベル委員会委員に強い印象を残したと考えられる。

1923年7月17日付けの第2書簡(A4判3枚)では、和田は1923年6月のアダムズの来日時の活動について詳細に紹介している²⁴⁾。この書簡が書かれた時点でも、アダムズは東京に滞在していたが(東京の聖路加病院で乳癌の手術を受け、静養中であった)、日本での歓迎ぶりを具体的に説明している。まず書簡の冒頭で、「アダムズの最近の日本訪問が我々にいかに大きな喜びと励ましをもたらしかを伝える」と、書簡の目的に触れている。次に、日本側の女性団体が中心となって歓迎準備が進められたこと、インド、フィリピン、中国、韓国を経て、下関に到着し、宮島での休養の後、神戸では賀川豊彦のセツルメント施設を訪問し、さらに市民約700人に向け

た講演をしたこと、大阪では婦人会関西連合会の代表たちとの昼食会に出席し、その後約4500人の聴衆に対して「女性と平和」という題目の講演²⁵⁾を行なったことなどを詳しく記している。書簡の最後に、日本女性たちがアダムズの来日に感謝していること、いかなる障害があろうとも、市民の平和、福祉のみならず国際的な平和、福祉のために活動することを我々が決意したことを明らかにした上で、1923年ノーベル平和賞にアダムズを強く推薦している²⁶⁾。

以上のように、和田はアダムズを高く評価し、ノーベル平和賞に推薦していた。和田とアダムズの出会いは、和田のアメリカ留学中である。1917年末に留学のため日本を出発した和田は、アメリカ到着後にニューヨークに向かう途中、雪で足止めになったシカゴにおいてハル・ハウスを訪問して感銘を受けている（アダムズは留守中で面会はできず²⁷⁾）。さらに和田が1921年7月にウィーンで開催された婦人国際平和自由連盟第3回大会に日本代表の一人として参加した際、大会議長のアダムズと親しく接する機会をもった。そうした縁で、アダムズの来日が実現し、和田は滞在中の通訳、案内役を務めることになった²⁸⁾。和田の自伝や著作集を見る限り、アダムズはインドのタゴール（1861～1941年）とともに和田に生涯を通じて大きな影響を与えたことがわかる²⁹⁾。

以上の和田の推薦状には、資料2通がつけられていた。ともに婦人会関西連合会の「フルヤ・トヨ」の署名が入ったもので（日付なし）、ノーベル委員会への推薦状ではなく、アダムズ来日時のスピーチ原稿である³⁰⁾。「フルヤ・トヨ」は、和田の推薦状、その他の著作に説明はないが、古屋登世子（1887頃～1955年）³¹⁾と考えられる。理由としては、第1にアダムズの大阪到着を伝えた『東京朝日新聞』は、大阪朝日新聞社で行なわれた午餐会において「古屋登世子女史は連合会員を代表して歓迎の辞を述べ関西婦人会関西連合大会の過去四年間に於ける事業の概況を述べ世界の平和運動と軍備縮小に対し婦人として活動せることを報告し、尚将来女史と共に相提携して平和運動を続行せんことを約し」たと記されている³²⁾。第2に、古屋の自伝である『女の肖像』³³⁾にある肖像写真が和田のノーベル平和賞推薦状に添付した写真の1枚（裏に「1923年6月22日に大阪駅にて婦人会関西連合会のフルヤ夫人から歓迎を受けるアダムズ氏」という和田による手書きの説明がある）の女性と同一とみられること、第3に、『女の肖像』に古屋自身が「大阪英語社交界に臨んで、婦人の啓発を計ることに日もまだ足らざる思ひをしたのも此の頃であり、朝日新聞の後援する全関西婦人連合会に於て、女性の為に気を吐く傍ら、国際婦人社交界の建設を企て、社会と女性問題を提唱し続けた」と記し、全関西婦人連合会（婦人会関西連合会が1923年に改称した団体）において活動していたことがわかるからである³⁴⁾。

古屋による1通目の資料（A4判2枚）は、アダムズ歓迎のスピーチ原稿である。まず婦人会関西連合会を代表してアダムズの来日を歓迎すると記した後、日本の女性の置かれた状況に触れ、社会活動について日本の女性たちが経験不足、訓練不足であるため、アダムズの支援、指導を求めていることを述べている。アダムズの来日が大きな喜びであり、感動と励ましをもたらしたと述べてスピーチを結んでいる。2通目の資料（A4判5枚）は、婦人会関西連合会について設立

の沿革、活動内容などを紹介したスピーチ原稿である³⁵⁾。

以上のように、日本からも推薦状が出された。和田がなぜ推薦状を出したのか、その経緯は不明である。和田自身、推薦状においても、その他の著作においてもこの点について言及していない。しかし、1923年に欧米で活発化したアダムズ推薦の動きと時期を一にしていることを考えると、アダムズ来日を準備する過程あるいは来日中に、アダムズ周辺の関係者、あるいは婦人国際平和自由連盟の関係者からアダムズの推薦キャンペーンの話聞き、推薦状発出の働きかけを受けた可能性が高い。

しかし、結局1923年にアダムズがノーベル平和賞を受賞することはなかった。1923年の平和賞受賞者は保留となり、1924年に該当者なしとして処理された。

(3) 1929年の推薦

1929年度のノーベル平和賞候補として、再び日本からアダムズの推薦がなされた。すなわち、推薦状の発出順に列挙すれば、推薦者は1928年11月30日付けの男爵阪谷芳郎³⁶⁾、東京女子大学学長安井てつ³⁷⁾、同年12月7日付けの大日本体育協会岸清一³⁸⁾、同年12月12日付けの外務次官吉田茂³⁹⁾、貴族院議長徳川家達⁴⁰⁾、日本婦人平和協会理事河井道⁴¹⁾、同年12月27日付け前文部大臣水野錬太郎⁴²⁾の計7人であった。1928年11月末からの約1ヵ月間に発出されている。

ノーベル研究所の1929年推薦状ファイルにこの7人の推薦状はすべて保管されているが、実際にノーベル委員会が正式に受理し、整理番号をつけているのは阪谷、吉田、徳川、水野の4通の推薦状である。残り3通の推薦状に整理番号はなく、参考資料として使われたとみられる。これは、推薦資格によるのであろう。安井、岸、河井の3名は民間人であり、政治家とは異なった扱いになった。なお、吉田は外交官であり、この当時外務次官の地位にあった。議員でも閣僚でもなかったが、吉田は「外務副大臣 (Vice-Minister of Foreign Affairs)」と推薦状の冒頭で名乗っている。

内容についてであるが、どれもそれぞれ異なる文章で、アダムズ推薦の理由を明記している。7通すべてを個別に紹介するのは避け、まとめて要点を記したい。どの推薦状もアダムズを1929年のノーベル平和賞に値する人物であると強調している。その理由づけでは、それぞれがアダムズのような活動に触れている。まず、シカゴ (ハル・ハウス) における貧民救済活動に触れているのは、阪谷、安井、吉田、河井、水野である。婦人国際平和自由連盟 (WILPF) 会長であることに触れているのは、阪谷、岸、吉田、水野である。第一次世界大戦中のヨーロッパにおける平和活動 (1915年の国際会議など) について触れたのは、吉田、水野である。1928年7月～8月にホノルルで開催された汎太平洋会議 (Pan-Pacific Congress) でアダムズが議長を務め、日本からの女性代表が感銘を受けたことに触れたのは、阪谷、徳川、水野である (正確には、汎太平洋女性会議 [Pan Pacific Women's Conference] は1928年8月にホノルルで開催された)。アダムズの著作『平和のより新しい理想 (Newer Ideals of Peace)』と『平和とパン (Peace and

Bread』(正確な書名は、『戦時の平和とパン (Peace and Bread in Time of War)』)に触れているのは、安井、徳川である。アダムズの来日に触れているのは阪谷、河井、水野の3人である。そのうち、河井と水野はアダムズの来日を1922年として、誤った年を記している(正確には1923年)。

以上のように、推薦状はアダムズの活動を多角的に取り上げ、日本に対するアダムズの影響力の大きさを訴える内容になっている。内容の濃い推薦状といっても良い。しかし、吉田、徳川らが推薦状に署名をしているのは確かであるが、アダムズをよく知り、推薦状の内容を自分自身で書けたかについては疑問が残る。7人のうち、女性活動家である河井の関与もあるのかもしれない。日本婦人平和協会理事で執行委員会のメンバーである河井の推薦状が最も長く、詳細に書いていることを考えると、この1929年のアダムズ推薦の世話人のような立場であったのかもしれない。実際に、1929年の推薦について、推薦者の一人、岸は推薦状の冒頭で「日本婦人平和協会の執行委員会の推薦により、1929年12月のノーベル賞の指名のためにシカゴのハル・ハウスのジェーン・アダムズ氏をあなた方の委員会に推薦しようと、日本のメンバー 12名に謹んで加わります」と記している⁴³⁾。日本婦人平和協会の関与は確かであろう。

1923年時のアダムズの推薦が和田とみ、古屋登世子の2名によるものであったが、その6年後の1929年時の推薦では、政府の要人を動員するまでになっていた。この6年間における違いには目を見張るものがある。多彩な人材、支持者を得て、女性団体が日本で発展し、活動が活発化した結果といえるかもしれない。

しかし、1929年にアダムズがノーベル平和賞を受賞することはなかった。1931年まで待たねばならなかった。しかも、それは女性受賞者としては1905年のズットナー以来のことであった。アダムズの推薦と受賞は、ノーベル平和賞を選考するノーベル委員会の側において女性の活動の認知が遅れたことを教えてくれるのである。

3 ロバート・ベーデン＝パウエルの推薦 (1928年、1939年)

(1) ロバート・ベーデン＝パウエル

ロバート・ベーデン＝パウエルは、ボーイスカウト運動創始者のイギリス人である。ボーア戦争に従軍して活躍し、騎兵团総監となっていたベーデン＝パウエルは、1907年に少年の心身を鍛える場としてイギリスにボーイスカウトを創設した⁴⁴⁾。その後、アメリカ、ヨーロッパ各国などにボーイスカウト運動は広まった。

この運動は日本にも伝えられた。イギリスを訪問し、ボーイスカウトを実際に視察する日本人も現れた。たとえば、1911年には陸軍大将の乃木希典(1849～1912年)がロンドンでベーデン＝パウエルと会見し、1921年には訪欧中の皇太子(後の昭和天皇、1901～1989年)がイギリスでベーデン＝パウエルに会い、ボーイスカウト大会を視察している。また、ベーデン＝パウ

エル自身も1912年に日本を訪問している⁴⁵⁾。こうして、日本においてボーイスカウト運動が注目されるようになり、各地に少年団が生まれた。1922年にそれらの少年団がまとまる形で、全国統一組織の「少年団日本連盟」が設立され、日本におけるボーイスカウト運動が正式に始まった⁴⁶⁾。初代総裁は当時東京市長であった政治家の後藤新平（1857～1929年）⁴⁷⁾、初代理事長は伯爵二荒芳徳（1886～1967年）⁴⁸⁾であった。

その後、「少年団日本連盟」は1935年に「大日本少年団連盟」と組織名を変更し、戦時色の強まった1941年に解散となり、大日本青年団、大日本連合女子青年団、帝国少年団協会と統合した「大日本青少年団」が新たに発足した。第二次世界大戦後の1949年にGHQの認可を得て、「ボーイスカウト日本連盟」として再出発した。

ベーデン＝パウエルは、ノーベル平和賞に度々推薦されていた。1928年を最初として、1933年、1937年、1938年、1939年の合計5回である。このうち、1928年と1939年の2回に日本人がかかわっている。また、ノーベル研究所の年次報告書リストでみると、1928年は10件の推薦状が出され、その他の4回は1件から3件の推薦であった。これをみる限り、1928年は明らかに国際的なキャンペーンが存在していたと考えられる。

(2) 1928年の推薦

1928年のノーベル平和賞候補として、ベーデン＝パウエルを推す推薦状が日本からノーベル委員会に出されている⁴⁹⁾。推薦者は、後藤新平、渋沢栄一、小村欣一、林博太郎、新渡戸稲造、沢柳政太郎の6名であり、この順番で署名がなされている。少年団日本連盟総長である後藤がこの推薦状の主役といえるであろう。

ベーデン＝パウエルを推す後藤らの推薦状は、ノーベル委員会により正式に受理され、ノーベル研究所年次報告書にも記録されている。ノーベル研究所年次報告書によれば、1928年にベーデン＝パウエルを推薦していた者は合計10名である。イギリス議員、ノルウェー国会議員、デンマーク国会議員、スウェーデンのウプサラ大学教授、チェコ・スロヴァキア上院議員、ベルギー政府、赤十字国際委員会総裁のほか、アジアからも後藤新平ら日本人、さらにタイの王子、外務大臣プラバンド（Traidos Prabandh）もいた⁵⁰⁾。

後藤らの推薦状は、英文と日本語の2通からなる。日付は、ともに1927年12月23日付けであり、内容は同一である。日本語のもの（A4判4枚）は、本文に加えて、末尾には署名者6名の肩書きまで印刷されていた。署名は、墨書きで丁寧になされている。まず、冒頭でスカウト運動の創始者であるベーデン＝パウエルを1928年度ノーベル平和賞に推薦するとした後、そのスカウト運動の説明が続いている。たとえば、「スカウト運動の真精神は崇高なる人類愛に根底を置き国籍宗教人種の異同を超越して真に全人類を暖かき兄弟愛によりて抱擁し相互敬愛協力提携して恒久平和共存共栄の実を挙げんとするものなりとす創始者に依り提唱せられてより以来茲に二十ヶ年現時国際的に相誓盟協同する国別実に四十二其団員二百万を算するに至りその真摯なる

実行は年毎に共鳴理解を深めて驚くべき発展を示しつつあり」としている。さらに、その教育効果についても紹介し、「社会国家生活の真意義たる相互扶助犠牲奉仕の徳性を体験涵養せしむるか故に自覚せる祖国愛と純真なる兄弟愛より発する国際協調の真意義を如実に自得せしめ未来に於ける争闘の絶滅を期す」と述べている。祖国愛、兄弟愛から国際協調の意義を理解し、争闘を絶滅させようとしていることを高く評価しており、その国際協調主義への支持が見出せる。最後に日本とのかかわりについても触れ、「今や我国に於ては七万の健児を擁し平和にして強健有為なる市民として新しき時代の平和建設に奮闘努力する青少年を錬成しつつあり」と述べ、日本も積極的にかかわり、平和建設に奮闘努力する青少年を生み出しているとしている。英文の推薦状も同内容の主張を展開している。

この推薦状で特徴的なこととして、2点が挙げられる。まず第1に、渋沢栄一推薦時の当事者、関係者がその推薦者の半分を占めていたことである。すなわち、この6名のうち、渋沢、後藤、沢柳は1926年、1927年の渋沢栄一のノーベル平和賞推薦に直接かかわっていた。すなわち、渋沢本人がノーベル平和賞と3回目のかかわりとなり、後藤が2回目、沢柳が3回目となる。これは、日本の政界、財界の間にノーベル平和賞への関心が続いていたことを示していると考えられる。その結果、この推薦状からは、日本人がノーベル平和賞に段々と慣れてきた印象が読み取れる。たとえば、余裕をもって締め切りまでに提出できるよう、署名が集められて実際に発出されている。さらに英語版と同一内容の印刷された日本語版推薦状も用意され、手際の良さが感じられる。

第2に、推薦状の内容に関しては、国際的な相互理解を生み、平和の達成手段としてボーイスカウト運動を高く評価し、日本もそれに深くかかわっていることを肯定的に紹介しており、祖国愛と国際協調主義がうまく均衡した内容となっている。1920年代後半の時代の雰囲気を反映した内容といえるかもしれない。

ベーデン＝パウエルがいかなる経緯で推薦されるに至ったかについては、日本ボーイスカウト連盟が1973年に刊行したその50周年記念本において詳しく説明しているので、引用する。

「デンマーク・ノルウェー・スウェーデン3カ国のボーイスカウト連盟から、1928（昭3）年度ノーベル平和賞受賞候補者にベーデン・パウエル卿を推薦しようと提議されたことがある。そして、1927（昭2）年9月17日付、3連盟連署で、ボーイスカウト国際事務局加盟の各国連盟に対してその協力を希望する文書が発送された。

全世界のスカウトが敬愛してやまないベーデン・パウエル卿をノーベル平和賞受賞候補者に推薦する——もとより日本連盟でも、この提議には全面的に賛成であった。そこで日本連盟は、推薦有資格者である故後藤新平総長を筆頭に、貴族院議員・国際連盟協会会長・文政審議会委員渋沢栄一、外務省情報部長小村欣一、文政審議会委員・東京帝大教授林博太郎、貴族院議員・前国際連盟名誉理事長新渡戸稲造、貴族院議員・帝国教育会会長沢柳政太郎らに依頼して推薦書を作成し、また全国の加盟団の推薦書もそえて外務省を経て在ノルウェー

永井公使よりノーベル委員会に提出するよう取運んだのであった。しかし、1928年度は受賞者なしということになった。⁵¹⁾

この記述のように、ベーデン＝パウエルの推薦は、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンのボーイスカウト連盟からの提案であり、国際的な推薦キャンペーンの一環であったことがわかる。日本側も、それに賛成し、着実に準備を進めたのである。日本語版の推薦書も印刷で作られ、日程的にも余裕をもったスケジュールであった。また、推薦者についても、有資格者ということで6名が選ばれ、署名が集められた。この時期の少年団日本連盟総長が後藤新平であったことは、日本側の対応をスムーズにさせた要因かもしれない。後藤は、有力政治家として政界に大きな影響力を有しており、また渋沢栄一の推薦でノーベル平和賞に既にかかわっており、その時の人脈も活きたのであろう。なお、上記のボーイスカウト連盟の説明に出てくる「全国の加盟団の推薦書」は、ノーベル研究所の1928年度推薦状ファイルには見当たらない。

以上の1928年の推薦であるが、ベーデン＝パウエルがノーベル平和賞を受賞することはなかった。1928年度は保留となり、翌年結局該当者なしとされ、受賞者は出なかったのである。

(3) 1939年の推薦

ベーデン＝パウエルに対する日本人の推薦は、1939年にも見出せる。大日本少年団連盟理事長の伯爵二荒芳徳がノーベル委員会宛の推薦状2通によりベーデン＝パウエルを1939年ノーベル平和賞に推薦している。2通とも二荒1名の推薦である。まず1939年10月1日付けの第1推薦状(A4判1枚)において、二荒は列国議員同盟メンバーとして1939年ノーベル平和賞にベーデン＝パウエルを推薦する案を提出するとし、ノーベル委員会で考慮するよう求めている⁵²⁾。次に、同年12月16日付けの第2推薦状(A4判1枚)では、前の推薦状でベーデン＝パウエル推薦案の動機を書くべきであったと思うと述べ、その動機を記している。「ベーデン＝パウエル卿はボーイスカウト運動の創始者であり、同運動は1908年以来、世界規模の兄弟愛の精神を原理として有しており、世界中の国々の青年層を相互理解に導き、少年たちのまさに友好を通じて世界平和の確立に多くのことを成し遂げている」と述べ、ボーイスカウト運動を高く評価している。さらに、デンマーク人、フィンランド人、アイスランド人、ノルウェー人、スウェーデン人計12名の人名を具体的に挙げて、以上の推薦動機は彼らがこの夏に出したという提案と同じものであり、それに詳しい説明を見出せるので、それをみて頂けるとありがたいとしている⁵³⁾。

二荒のベーデン＝パウエル推薦も、第2推薦状にみられるように、北欧の関係者からの働きかけにより送付された可能性が高い。実際に二荒が挙げた北欧人の推薦状も1939年の推薦3件のうちの1つとなっており、国際的なキャンペーンの一環とみることができよう⁵⁴⁾。

なお、1939年の推薦について、『日本ボーイスカウト運動史』は「ベーデン・パウエル卿は、1939(昭14)年度のノーベル平和賞受賞者に決定したのである。しかし、ドイツのポーランド進撃によって第2次世界大戦がはじまり、1939年度も受賞者なしとなった。二度三度と受賞が

決定しながら戦争のため中止となったベーデン・パウエル卿のノーベル平和賞受賞は、こうして、ついにかれの生存中には実現しなかった』⁵⁵⁾としているが、これは事実と反する。1939年のノーベル平和賞選考が中止となったのは事実であるが、その前にベーデン＝パウエルへの授賞が決定していたわけではない。

4 エドワード・プライス・ベルの推薦 (1931年)

(1) エドワード・プライス・ベル

エドワード・プライス・ベルは、1869年アメリカ・インディアナ州生まれの国際ジャーナリストである⁵⁶⁾。13歳から地元紙で働いた経験をもち、インディアナ州のウォバッシュ大学を卒業後、1898年シカゴの『シカゴ・レコード (Chicago Record)』紙で記者として働き始めた。1900年に同紙の特派員としてロンドンに赴任。同紙は売却されて『シカゴ・デイリー・ニュース (Chicago Daily News)』のもとに移ったが、ベルは『シカゴ・デイリー・ニュース』の特派員としてその後22年間ロンドンにとどまり、ヨーロッパ問題を中心に報道を行ない、国際ジャーナリストとしての地位を確立した。外相をはじめイギリス閣僚とのインタビューなどの記事は注目された。1923年にベルはアメリカに戻り、国内で講演活動を行なった。1925年には世界を回り、国際問題について各国指導者にインタビューをし、それをまとめた本を出版している⁵⁷⁾。1928年にはフーヴァー大統領 (Herbert Clark Hoover, 1874～1964年) の南米ツアーに同行し、大統領とも親しくなり、その後、英米関係の緊密化のため、フーヴァー大統領とイギリスのマクドナルド首相 (James Ramsay MacDonald, 1866～1937年) との会談をアレンジしている。1930年のロンドン海軍軍縮会議では英米間の調整役となり、条約締結に貢献した。1932年に『シカゴ・デイリー・ニュース』を退職したが、取材活動は続け、1934年には2回目の世界ツアーに出て、各国指導者にインタビューを行なっている。1938年に病気となり、ミシシッピ州に居を構え、執筆活動を継続したが、1943年に死去している。

ベルは、1931年にノーベル平和賞に推薦されている。この年にのみ推薦がなされている。推薦は、2件出ている⁵⁸⁾。アメリカ・シカゴのノースウェスタン大学の教授たちと後述の幣原喜重郎外相兼首相臨時代理 (1872～1951年)⁵⁹⁾であった。しかし、結局ベルはノーベル平和賞を受けることはなかった。

(2) 1931年の推薦

幣原がベルをノーベル平和賞に推薦していたことは、既に日本でも知られている⁶⁰⁾。幣原は、1930年12月11日付けの推薦状 (A4判1枚)⁶¹⁾において、「1930～31年のノーベル平和賞受賞者として『シカゴ・デイリー・ニュース』紙外信部長のエドワード・プライス・ベルを推す提案が委員会に出されていると聞いているが、謹んでそれを支持したい」と記している。それに続け

て、幣原は、ベルを個人的に知っているとし、「国際問題、とりわけ極東についての彼の知識、特に国家間の平和を促進しようとするたゆまぬ努力を称賛する。それゆえ、欧米にいる彼の大勢の友人たちは、政治記者が示すことのできる最高の価値、すなわち地球上の平和の促進という、この重要な報賞の候補に彼を推すことに関心をもっているが、私も彼らの仲間入りをしたい」としている。そして、幣原は最後に「ベル氏にノーベル賞を授与することにより、平和のために役立つよう、新聞業界に力強い励ましを与えることになろう」と結んでいる。

このように、幣原は、ベルが報道を通して世界平和のために貢献したと高く評価している。推薦状の中に、個人的に知っていると書いているが、これはベルが世界中の政治家にインタビューをして回っているときに、幣原にもインタビューしたことによる。ベルのインタビュー相手は、イタリアのムッソリーニ首相(Benito Mussolini, 1883～1945年)、フランスのポワンカレ首相(Raymond Poincaré, 1860～1934年)、イギリスのマクドナルド首相、アメリカのクーリッジ大統領(Calvin Coolidge, 1872～1933年)、日本の加藤高明首相、幣原喜重郎外相など、多様である。加藤、幣原とのインタビューは1925年5月に行なわれている。ベルは、二人に対して好意的な記事を書き、幣原自身も対米世論工作として捉え、アメリカ世論が好転しつつあるとの感触を得たとされる⁶²⁾。こうして、両者は好感をもつことになり、その延長線上にこのノーベル平和賞推薦も位置づけられるのであろう。

おわりに

以上、第二次世界大戦前の日本人推薦者について候補別にまとめて紹介した。この時期の日本人による推薦に関して、特徴として3点を指摘できるであろう。

第1に外国でのノーベル平和賞推薦キャンペーンに外国からの誘いにより参加したと考えられるケースが第二次世界大戦前の時期には多い。ノーベル平和賞自体の知名度が日本では必ずしも高くないため、まずは外国経由でノーベル平和賞の情報が入ったのであろう。1912年分の推薦には、渋沢栄一の推薦の際に活躍する人物、原田助もいることから、その経験が日本人による日本人候補擁立のきっかけになったと考えるのが自然であろう。

第2に、1926年、1927年に渋沢がノーベル平和賞候補となったことを経て、1920年代に日本人による推薦活動は活発になる。渋沢の推薦では多くの日本人政治家、学者が動員された。その結果、ノーベル平和賞の存在が認知され、彼らが1920年代末から1930年代初めまで推薦人となった。しかし、その際の候補は、独自の視点から彼らが探し出したのではなく、外国で有望な候補として推薦キャンペーンが行われていた人物あるいは外国からの個別に働きかけがあった人物を推薦するという形をとっている。

第3に、日本人の推薦が受賞者の決定に対して影響力をもったとはいえないが、大きな意義も見出せる。すなわち、この第二次世界大戦前の時期において、日本人が推薦した年にその候補が

ノーベル平和賞を受賞した例はない。実際にノーベル平和賞を受賞したのは、唯一アダムズであるが、1929年の推薦の2年後のことであった。しかし、日本人が特に第一次世界大戦後、活発にノーベル平和賞の推薦を行なった結果、日本の存在、また日本人の見解をノーベル委員会に示すことはできたと考えられる。日本人の推薦状は、どれも単なる儀礼的なものではなく、推薦理由を詳しく記した内容の濃いものであった。その点で日本人による推薦は、「平和」にかかわる個人、団体を通した国際問題、国際情勢に対する日本からの情報発信という意味を有しており、貴重なものであったといえよう。逆に、日本人の側もノーベル平和賞推薦を通して国際問題、国際情勢について学ぶことは多かったと考えられる。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補——」(『地域政策研究』第13巻第2・3合併号、2010年11月)、1～15頁。
- 2) 1926年の渋沢米一の推薦について、上記拙稿において紹介した推薦状以外に新たな推薦状3通をノーベル研究所の推薦状ファイルに発見した。発出順に簡単に紹介する。
第1の推薦状(A4判1枚)は、1925年12月25日付けのモット(John R. Mott)によるものである。アメリカ人のモットはYMCAの仕事で来日中に渋沢の推薦の話を知り、「最大の喜びと満足」と表現している。知り合ってから約25年間、異なる国家、人種間の正しい関係を促進しようと継続して利他的、建設的で成果の多い活動を渋沢がしてきたとする。特に、日米間の理解を改善しようとしてきた渋沢の活動も強調している(Letter from John R. Mott to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 25 December 1925, PFL 16/1926 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1926)。
第2の推薦状(A4判2枚)は、1926年1月11日付けの松平恒雄駐米大使によるものである。松平は、渋沢の生涯を簡潔にまとめているが、日本と外国との友好関係の促進(特に日米関係)に尽力してきたことを具体的に記している(Letter from Tsuneo Matsudaira to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 11 January 1926, PFL 16/1926 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1926)。1925年11月3日付けの原田助による推薦状を要約したような内容である。
第3の推薦状(A4判1枚)は、1926年1月18日付けの日置益駐ノルウェー元公使・中国関税特別会議特命全権大使によるものである。日置は、渋沢が国際平和、特に日米間の平和のために行なってきた崇高な活動からノーベル平和賞に推薦すると簡潔に記している(Letter from Eki Hioki to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 18 January 1926, PFL 16/1926 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1926)。
- 3) ノーベル財団ノミネーション・データベース<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2011年9月10日アクセス。
- 4) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjorelse for Nobels Fredspris* (Kristiania/Oslo : Steenske Bogtrykkeri/Grøndahl & Søn Boktrykkeri) .
- 5) 日本連合基督教共励会ホームページ<<http://www.jceu.agape.gr.jp/>>、2011年9月15日アクセス。
- 6) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjorelse for Nobels Fredspris 1911* (Kristiania : Steenske Bogtrykkeri, 1911), s.12. Letter from Samuel W. McCall to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 14 January 1911, PFL 17/1911, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1911.
- 7) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjorelse for Nobels Fredspris 1912* (Kristiania : Steenske Bogtrykkeri, 1912), s.11. Letter from Samuel W. McCall to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 20 January 1912, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1912.
- 8) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjorelse for Nobels Fredspris 1913* (Kristiania : Steenske Bogtrykkeri, 1913), s.12.
- 9) ノーベル平和賞の選考方法については、以下を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程——」(『地域政策研究』第13巻第4号、2011年2月)、29～33頁。
- 10) Letter from Tasuku Harada to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 14 March 1912, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1912.
- 11) 当時、澤谷辰治郎は世界連合キリスト教共励会の日本支部である日本連合共励会の幹事を務めていた。同団体の活動、組織については、澤谷自身による以下の文献が詳しい。澤谷辰治郎『基督信徒の訓練——一名共励会の綱領——』(日本連合共励会事務所、1910年)。
- 12) ベティーは、共励会創始者クラーク牧師の同級生のアメリカ人であり、来日して日本におけるキリスト教布教活動など

ノーベル賞の国際政治学

- に関する本を出版している。James H. Pettee, *Mr. Ishii and His Orphanage: A Japanese Apostle of Faith and His Asylum at Okayama* (Okayama: Asylum Press, 1894). James H. Pettee compiled, *A Chapter of Mission History in Modern Japan* ([Tokyo?]: Tokyo-Seishibunsha, 1895).
- 13) Letter from Tatsujiro Sawaya and James H. Pettee to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 16 March 1912, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1912.
 - 14) 原田健編『原田助遺集』(河北印刷株式会社、1971年)、497～512頁。海老沢有道「はらだたすく 原田助」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11巻、吉川弘文館、1990年)、704頁。前掲拙稿、「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補——」、6～7、9頁。
 - 15) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjølse for Nobels Fredspris* (Kristiania/Oslo: Steenske Bogtrykkeri/Grøndahl & Sønns Boktrykkeri) およびノーベル財団ノミネーション・データベース<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2011年9月10日アクセス。
 - 16) ジェーン・アダムズ『ハル・ハウスの20年——アメリカにおけるスラム活動の記録——』紫田善守訳(岩崎学術出版社、1969年)を参照。原著は、アダムズ50歳のときの自叙伝であり、1910年出版。そのほか、アダムズの平和運動については以下が詳しい。杉森長子『アメリカの女性平和運動史——1889年～1931年——』(ドメス出版、1996年)、第5章。
 - 17) アンゲリーカ・U・ロイッター、アンネ・リュッファー『ピース・ウーマン——ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち——』松野泰子、上浦倫人訳(英治出版、2009年)、53頁。
 - 18) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjølse for Nobels Fredspris 1923* (Kristiania: Steenske Boktrykkeri, 1923), s.7-9.
 - 19) 和田とみ(後に高良とみ)は富山県生まれ、1917年日本女子大学英文学部を卒業の後、渡米。アメリカのコロンビア大学大学院、ジョンズ・ホプキンス大学大学院で心理学を学び、1922年コロンビア大学から博士号を取得し、同年に帰国。1923年九州帝国大学医学部精神科助手、1927年日本女子大学教授となる。第二次世界大戦後の1947年、第1回参議院議員選挙で当選し、参議院議員を2期務める(民主党から緑風会に移籍)。1952年には日本人として戦後初めてソ連を訪問し、シベリア抑留中の日本人に面会、さらに中華人民共和国にも入り、第1次日中民間貿易協定を締結した(芳賀登ほか監修『日本女性人名辞典』日本図書センター、1993年、436頁。高良とみ『高良とみの生と著作 第8巻母と娘の手紙 年譜・著作目録』ドメス出版、2002年、334～376頁)。
 - 20) 高良とみ『非戦を生きる——高良とみ自伝——』(ドメス出版、1983年)、62～63頁。
 - 21) ノーベル委員会により、推薦状に手書きで到着日が記されている。
 - 22) Letters from Tomi Wada to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 17 July 1923, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1923.
 - 23) 写真のうち、2枚は1923年6月22日に開催された大阪中之島公会堂での講演会「婦人と平和」の全景と和田とみが通訳をしている様子を写しているが、同じ写真が以下の写真集に収録されている。高良留美子編『世界的にのびやかに——写真集 高良とみの行動的生涯——』ドメス出版、2003年)、16～17頁。
 - 24) Letters from Tomi Wada to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 17 July 1923, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1923.
 - 25) この講演内容は、『朝日新聞』に連載されている。大阪朝日新聞社は、社を挙げてアダムズを歓迎しており、アダムズの滞在中の動静について詳しく報道している。「婦人と平和 アダムズ女史述」(『東京朝日新聞』1923年6月23日、24日、26日)。
 - 26) アダムズの来日時の活動をまとめたこの第2書簡は、和田(高良)とみの著作集に収録されている「日本におけるジェーン・アダムズ女史(英文)」(高良とみ『高良とみの生と著作 第2巻社会への船出1921-24』ドメス出版、2002年、287～289頁。初出は婦人国際平和自由連盟WILPFのBulletinで英文)とほぼ同じものである。ノーベル平和賞推薦の最後の部分がないだけである。和田は、ノーベル委員会への推薦状のために用意した文章をその後、婦人国際平和自由連盟のために再利用したと考えられる。
 - 27) 高良、前掲『非戦を生きる——高良とみ自伝——』、47頁。
 - 28) アダムズ来日時の和田の活動、感想については、上記の「日本におけるジェーン・アダムズ女史(英文)」のほか、「ジェーン・アダムズ女史を迎える——日記より——」、「人としてのジェーン・アダムズ女史」、「ジェーン・アダムズ女史は、日本の女性に、何を望まれるのか?」(高良とみ、前掲『高良とみの生と著作 第2巻社会への船出1921-24』、279～286頁)を参照。
 - 29) 和田のアダムズ観は、たとえば以下も参照。「日本農村を見つめたアダムズ女史の眼——世界人の横顔(談)——」、「二〇世紀の光輝 ジェーン・アダムズ女史——最近ノーベル平和賞を贈られし——」、「アダムズ女史の印象」、「ジェーン・アダムズ女史を偲ぶ」(高良とみ『高良とみの生と著作 第3巻女性解放を求めて1925-35』ドメス出版、2002年、259～262、308～310、429～431、432～436頁)。そのほか、アダムズとのかかわりを紹介した研究に以下がある。杉森長子「解説」(高良とみ、前掲『高良とみの生と著作 第2巻社会への船出1921-24』、409～419頁)、同「戦間期女性の平和・軍縮運動」(早川紀代編『戦争・暴力と女性2 軍国の女たち』吉川弘文館、2005年、101～103頁)。
 - 30) Letters from Toyo Furuya to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, no date, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1923.
 - 31) 古屋登世子は、新撰組参謀結城無二三を父にもち、1917年に大阪にて英語の寺小屋を始め、その後古屋英学塾という大きな専門学校に発展させた英語教育者である。しかし、1935年に病気を理由に塾の乗っ取り事件に遭った(芳賀登ほか

- 監修『日本女性人名辞典』日本図書センター、1993年、923頁)。
- 32) 「ア女史を迎えて平和運動の提携」(『夕刊東京朝日新聞』1923年6月22日)。
- 33) 古屋登世子『女の肖像』(三友社、1940年)、表紙裏。
- 34) 同上、107頁。
- 35) この資料は、1923年6月22日に大阪朝日新聞社での午餐会において古屋が行なったとするスピーチ内容と一致する(「ア女史を迎えて平和運動の提携」『夕刊東京朝日新聞』1923年6月22日)。
- 36) Letter from Y. Sakatani to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 30 November 1928, PFL 6/1929 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 37) Letter from Tetsu Yasui to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 30 November 1928, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 38) Letter from Seiichi Kishi to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 7 December 1928, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 39) Letter from Shigeru Yoshida to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 12 December 1928, PFL 6/1929 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929. 同推薦状は、ノーベル財団ノミネーション・データベースには「Sh. Yoshida」と登録されている。
- 40) Letter from Ijesato Tokugawa to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 12 December 1928, PFL 7/1929 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 41) Letter from Michi Kawai to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 12 December 1928, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 42) Letter from Rentaro Mizuno to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 27 December 1928, PFL 10/1929 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929. 同推薦状は、ノーベル財団ノミネーション・データベースには「R. Mizuna」と登録されている。
- 43) Letter from Seiichi Kishi to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 7 December 1928, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1929.
- 44) ボーイスカウト運動の概説として、田中治彦『ボーイスカウト——二〇世紀青少年運動の原型——』(中公新書、1995年)を参照。ベーデン＝パウエルの生涯については、たとえば以下を参照。ウィリアム・ヒルコート『ベーデン＝パウエル——英雄の2つの生涯——』根岸真太郎監修、斎藤忠恭監訳(産調出版、1992年)。原著は1964年出版。同書には別訳もある。ウィリアム・ヒルコート、レディ・ベーデン・パウエル『ベーデン＝パウエル伝』村山有訳(ボーイスカウト日本連盟、1967年。改訂版1975年)。
- 45) スカウト運動史編さん特別委員会編『日本ボーイスカウト運動史——ボーイスカウト日本連盟50周年記念出版——』(ボーイスカウト日本連盟、1973年)、34～37、43～44、59～62頁。
- 46) 同上、72頁。戦前期に焦点を当てた研究書として、上平泰博、田中治彦、中島純『少年団の歴史——戦前のボーイスカウト・学校少年団——』(萌文社、1996年)、田中治彦『少年団運動の成立と展開——英国ボーイスカウトから学校少年団まで——』(九州大学出版会、1999年)が参考になる。
- 47) 後藤新平は、岩手・水沢出身の医師であったが、その後、内務官僚として衛生局長などを務め、1898年台湾総督府民政局長として植民地経営で実績を残し、1906年南滿州鉄道初代総裁、1908年逓信大臣兼鉄道院総裁、1910年拓殖局長兼任、1916年内務大臣兼鉄道院総裁、1918年外務大臣、1920年東京市長、1923年内務大臣兼帝都復興院総裁を歴任した政治家である(御厨貴編『時代の先覚者・後藤新平1857-1929』藤原書店、2004年)。
- 48) 二荒芳徳は、伊達宗徳侯爵の九男として生まれ、東京帝国大学法学部を卒業後、官吏となり、愛知県庁を経て、静岡県学務課長時代に少年団に関心をもつ。1917年、休職してヨーロッパへ視察旅行に行き、イギリスでベーデン＝パウエルにも面会する。帰国後、宮内省書記官となり、1921年皇太子の訪欧では随行人となり、皇太子とベーデン＝パウエルとの面会のお膳立てをした。その縁もあり、少年団日本連盟で中心的な存在となった(上平泰博、田中治彦、中島純、前掲『少年団の歴史——戦前のボーイスカウト・学校少年団——』、78～80、190～193頁、田中治彦、前掲『少年団運動の成立と展開——英国ボーイスカウトから学校少年団まで——』、160～166頁)。
- 49) Letter from Shimpei Goto et al. to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 23 December 1927, 「推薦状」後藤新平、渋沢栄一、小村欣一、林博太郎、新渡戸稲造、沢柳政太郎宛ノーベル賞金委員会宛、昭和2年12月23日付、PFL 25/1928, in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1928. なお、同書簡はストックホルムの在スウェーデン日本公使館経由で提出されている(1928年1月28日付の日本公使館の送り状がつけられている)。
- 50) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjølse for Nobels Fredspris 1928* (Oslo: Steenske Boktrykkeri, 1928), s.8.
- 51) スカウト運動史編さん特別委員会編、前掲『日本ボーイスカウト運動史——ボーイスカウト日本連盟50周年記念出版——』、210～211頁。
- 52) Letter from Yoshinori Futara to the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 1 October 1938, PFL 86/1938 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1938.
- 53) Letter from Yoshinori Futara to M. R. Moe, the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 16 December 1938, PFL 86/1938 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1938.
- 54) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjølse for Nobels Fredspris 1939* (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1939), s.7.

- 55) スカウト運動史編さん特別委員会編、前掲『日本ボーイスカウト運動史——ボーイスカウト日本連盟50周年記念出版——』、211頁。この記述の背景には、これが執筆された当時に読まれていたベーデン＝パウエル伝の邦訳が、「1939年にはノーベル平和賞を贈られることに決定した。ボーイスカウト運動を通じて世界の平和に貢献するところ大であり、各国間の友愛親善を増進した……しかし……運命は皮肉であった。1939年にはヒットラーの進撃でノーベル平和賞は授与されなかった」と訳していたことに理由があると考えられる（ウィリアム・ヒルコート、レディ・ベーデン・パウエル、前掲『ベーデン・パウエル伝』村山有訳、240～241頁）。同書の新訳では、「1939年、世界の総長ベーデン＝パウエルは、自分の知らないうちにノーベル平和賞受賞者候補に指名推薦されていた。‘1938年とそれまでの30年間に、ボーイスカウト運動を通じて“諸国の友愛を最もよく振興させ、常備軍の撤廃と縮小、平和会議の設立と増進に貢献”した’者ということであった。1939年の秋にノーベル平和賞はなかった。というのは、世界に平和がなかったからである。ヒットラーが進軍を開始した」とあり、より正確な内容になっている（ウィリアム・ヒルコート、前掲『ベーデン＝パウエル——英雄の2つの生涯——』根岸眞太郎監修、安齋忠恭監訳、541頁）。
- 56) ベルの経歴については、以下のホームページと文献を参照した。“Edward Prince [sic] Bell,” <<http://www.depauw.edu/library/archives/ijhof/inductees/bell.htm>>. “Inventory of the Edward Price Bell Papers, 1886-1951, bulk 1900-1942,” <<http://www.newberry.org/collections/findingaids/bell/Bellpr.html>>. ともに2011年9月15日アクセス。James D. Startt, *Journalism's Unofficial Ambassador: A Biography of Edward Price Bell, 1869-1943* ([Athens, Ohio]: Ohio University Press, 1979).
- 57) Edward Price Bell, *World Chancelleries: Sentiments, Ideas, and Arguments Expressed by Famous Occidental and Oriental Statesmen Looking to the Consolidation of the Psychological Bases of International Peace* (Chicago: The Chicago Daily News, 1926).
- 58) Det Norske Stortings Nobelkomite, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1931* (Oslo: Steenske Boktrykkeri, 1931), s.8.
- 59) 書簡を出した時点で、幣原は外相兼首相臨時代理を務めていた。ロンドン海軍軍縮会議の結果、締結されたロンドン条約が統帥権干犯問題を引き起こし、浜口雄幸首相は1930年11月東京駅で狙撃され、重傷を負ったため、療養中であった。結局、浜口内閣は1931年4月総辞職し、第二次若槻礼次郎内閣が発足するが、幣原は同内閣総辞職の同年12月まで外相に留まった。
- 60) 服部龍二『幣原喜重郎と二十世紀の日本——外交と民主主義——』（有斐閣、2006年）、100頁。前掲ホームページ “Edward Prince [sic] Bell,” <<http://www.depauw.edu/library/archives/ijhof/inductees/bell.htm>>、2011年9月15日アクセス。
- 61) Letter from Kijuro Shidehara to the Nobel Peace Prize Committee of the Norwegian Parliament, dated 11 December 1930, PFL 3/1931 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1931.
- 62) 服部龍二、前掲『幣原喜重郎と二十世紀の日本——外交と民主主義——』、99～100、114頁。Edward Price Bell, *op. cit.*, pp.133-143. ベルの英文書には、幣原からの1925年6月8日付け礼状も収録されている。

付記

本稿は、2011年度高崎経済大学研究費による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。ノルウェー・ノーベル研究所での調査では、研究所スタッフ、とりわけMs. Anne Cecilie Kjellingに大変お世話になった。心よりお礼申し上げます。